

第Ⅳ章 まとめ

厚幌1遺跡は過年度の調査により、アイヌ文化期までの遺構が確認されており、縄文時代においては環境、災害イベントを示唆する報告が成されている(厚真町 2004)。今年度の調査ではアイヌ文化期の道跡を1条検出したが、主体は縄文時代の遺構及び遺物であった。出土する土器は後期初頭の余市式土器が主体を占めるが、前期前葉の土器も少なからず認められる。前期前葉の土器群は今回の調査で底部片が出土していないが静内中野式の範疇であると思われる。この前期土器群の中に器表面が黒色を呈する「胎土に滑石を含む土器」(以下 滑石土器)が出土し、同地域で出土する同様の土器群との関係が示唆される。また、過年度に報告された地滑り堆積物に関連する災害イベントとして、上幌内モイ遺跡対岸の地滑り地形が挙げられる。このように本遺跡を通じて、土器の流通や自然災害についていくつかのデータを提示することが可能となっている。以下に個別に考察を述べる。

1. 胎土に滑石を含む土器について

滑石土器としたものは、胎土に滑石や蛇紋岩などの鉱物を含み、器表面が鈍い光沢を帯び、色調は黒色を呈している。町内ではヲチャラセナイ遺跡、ニタツナイ遺跡、幌内5遺跡で出土している。中でも上流域で本遺跡に近いヲチャラセナイ遺跡は縄文時代前期後葉の集落で、円筒下層土器d式、大麻V式土器が主体的に出土している。これら土器群の中に本遺跡と同様に滑石土器が少量であるが出土している。両遺跡とも出土量から推定して客体的にもたらされたものである。ヲチャラセナイ遺跡については胎土を偏光顕微鏡観察分析した結果、土器に含まれる鉱物は蛇紋岩で日高地方の可能性が高いという結果を得ている(厚真町 2013a)。このデータに基づくと前期後葉には同地域との交易があったことが考えられるが、縄文時代早期以降、厚幌ダム遺跡群からは富良野盆地系土器が搬入品として各遺跡から出土し、内陸ルートが想定されている。もちろん、富良野盆地系土器の存在で南(海側)からの交易を否定する要素にはならないが、滑石土器についても富良野市、芦別市、滝川市で出土例があることから、同様のルートで本遺跡にもたらされたとも考えられる。そこで、本報告にあたりヲチャラセナイ遺跡(前期後葉)、厚幌1遺跡(前期前葉)の滑石土器と富良野市(三の山3遺跡、学田3区1遺跡)、芦別市(滝里38遺跡)で出土した土器をX線粉末回折分析で比較を行った。滝里38遺跡は土器に含まれる鉱物のみ分析したので他の粘土鉱物との比較はできなかったが、厚真町と富良野地方で出土する滑石土器は「高MgO-低SiO₂グループ」の同一グループに分けられることが明らかとなった(厚真町 ヲチャラセナイ遺跡 第Ⅴ章第5節 印刷中)。また、厚幌1遺跡の土器はクリソタイルを中量含むが、アンチゴライトを含まないため、ヲチャラセナイ遺跡の滑石土器とはやや組成が異なる。しかし、一部の土器片によるものなので確定的とは言えない。滑石土器については厚真も含め出土量はあまり多くないが、黒色で光沢のある手触りと重さは一見土器のそれとは異なる質感を持っているため、見落とししていた可能性も考えられる。

今後、これらの産地も含め縄文の交易についての資料になるような調査を行いたい。

2. 厚真川上流域の地滑り

これまでの厚幌1遺跡で行われてきた調査により、厚真川上流域の災害イベントが明らかになってきた。そこで、同町内の遺跡の中で平成16～19年まで発掘調査を行った上幌内モイ遺跡の調査で少なからず災害に係わると思われる堆積と周辺の環境を紹介したい。